

“口から食べること”にこだわる市民病院のチーム医療

高砂市民病院 リハビリテーション部 言語聴覚士 杉下周平

高砂市民病院 脳神経外科 松井利浩

当院は兵庫県南西部の高砂市にある一般病床 274 床の公立病院です。高砂市においても人口の高齢化が著しく、65 歳以上の高齢者の割合は 25%を超えています。地域医療を担当する公立病院として、当院では高齢者の多くが持つ栄養や嚥下障害の問題に積極的に取り組んでいます。

入院患者の経口摂取を支援する NST

当院での取り組みは 10 年ほど前に看護師が嚥下障害の勉強会をスタートさせたことに始まり、診療報酬で摂食機能療法が算定できるようになったのを機に摂食嚥下チームを発足させました。チーム発足直後は口腔ケアや嚥下訓練などの目の前の患者の状態を改善させるための取り組みに注力していました。やがて嚥下障害患者の治療には栄養管理が欠かせないことを認識し、チームが栄養管理の役割をも担うようになりました。当院のチームの特色は“口から食べること”にこだわることにあります。それは入院患者の多くが在宅での療養を強く希望しており、その思いを叶えるためには、口から食事を摂ることができることが必要であるからです。当院の NST では従来の役割である栄養管理に加えて、嚥下機能の評価ならびに治療にも力を入れ、経口摂取困難な患者へは経口摂取を目指した栄養管理と日常のケアや訓練を、経口摂取可能な患者には十分な栄養量を安全に口から摂取する方法を検討し提案しています。単なる栄養管理にとどまらず“口から食べること”を強く意識する決意表明としてチーム名を Swallowing Nutrition Support Team (S-NST)としています。

形のある嚥下食

病棟での経口摂取を進める取り組みの中で、市民病院の管理栄養士と調理師は、トロミをつけたきざみ食が主体であった従来の嚥下食を進化させました。当院の嚥下食では、ミキサーにかけた料理にトロミ剤を混ぜ、ゲル化剤で再形成し、“形のある嚥下食”にすることで、患者さんの摂食意欲をかきたてる工夫がなされています。

また、新メニューを導入した時にはベッドサイドを訪問したり、病院イベントにおける嚥下食の試食会など、現場や患者の声を聞く機会を設け、病院食の調理に活かせるように努めています。

在宅療養を支える嚥下外来

当院では栄養や嚥下に問題のある患者の在宅療養をサポートする目的に週 1 回毎週火曜日午後には嚥下外来を開設しています。この外来は医師、看護師、言語聴覚士により運営され、ここでは嚥下機能や栄養状態の評価、訓練指導、ケアの方法、嚥下食の調理指導などをおこなっています。

在宅療養の継続のためには外来での指導が日々実践され続けることが大切です。嚥下外来ではとりわけ診察時間を長めに取り、患者の食事への思いに耳を傾け、家族の介護力を考慮しながら、医療チームだけでなく患者やその家族と共に指導内容を作り上げるように心がけています。

嚥下外来の開設当初は当院の退院患者が中心でしたが、最近では周辺の開業医や介護施設

からの紹介も増えてきています。これからは地域全体の栄養サポートと嚥下障害患者の在宅療養の支援を中心に活動を展開して行きたいと考えています。

地域と連携したチーム： 口（くち）ピカチーム

チームの看護師らが、嚥下障害患者のケアは生活の場でこそ重要との思いから誤嚥性肺炎の予防に着目し、地域で統一した口腔ケアの確立を目指しました。定期的に地域の施設や訪問看護師と合同の勉強会を行い、その中で口腔ケアの重要性は認識しているものの基礎的な知識やケア技術、人手不足などの問題を抱えていることを知りました。ケアの標準化にあたって特別な機材や職種がいなくても実行可能なケア方法を歯科衛生士会の協力を得ながら作成しました。これまでに 18 施設の賛同が得られ、各施設で標準化された口腔ケアの普及に努めています。このような口腔ケアの地域連携チームを「口（くち）ピカチーム」と名付け、活動を続けています。

市民病院のスタッフは栄養や嚥下に問題を抱える患者の入院治療から在宅療養までを支えるべく日々活動しています。そのためにも病院完結型の医療から地域と協同した地域完結型の医療・介護を支援していけるように活動したいと思います。今後の課題は高齢化する患者の終末期において食べることに関する支援をどのように考えていくか、患者にとって過剰にならず“良い医療”を追い求めていきたいと考えています。



高砂市民病院



S-NST カンファレンス風景



嚥下食の比較（上旧、下新）



嚥下外来



口腔ケア実技指導



地域勉強会（症例検討会）